THE ANNUAL REPORTS OF
HEALTH, PHYSICAL EDUCATION
AND SPORT SCIENCE
VOL.31, 15-22, 2012

原　著

レスリング選手の性格特性と試合直前の情緒変化と競技成績の関係
－2012ロンドンオリンピック大会における日本選手の場合－

The relationship between changes in personality traits and peak performance of Japanese wrestlers：The 2012 London Olympics

和　田　貴　広*，佐　藤　　満**，嘉　戸　　洋***

Takahiro WADA*, Mitsuru SATO** and Hiroshi KADO***

ABSTRACT

We suggested that personality traits play an important role in peak performance and that these traits are highly reproducible. Furthermore, changes in personality traits were closely related to peak performance just prior to event participation. To confirm these findings, the same method (Yatabe-Guilford (Y-G) Personality Inventory) was used to evaluate all Japanese wrestlers for changes in personality traits during an international event (the London Olympics). The Y-G Personality Inventory was administered twice (during training in Japan and just before participation in London). Results indicated that four wrestlers were type D (44%), two were type B (22%), two were type E (22%), and one was type A (11%). Changes in personality traits just prior to event participation and peak performance were closely related, much as previous reports had indicated. This finding was particularly true of type D and type B wrestlers in the present study. From these results, it can be suggested that changes in personality traits play an important role in peak performance for wrestlers, regardless of the personality type. Recent variations in personality traits and the importance of the relationship between changes in personality traits and peak performance must be considered. These aspects must be taken into account when devising effective training programs in the future.

Key words; Japanese wrestlers, Y-G, performance

* 国士舘大学体育学部（Kokushikan University Wrestling coach）
** 専修大学（Bulletin of Health and Sports Science Institute Senshu University）
*** 環太平洋大学（International pacific University）

Ⅰ．は　じ　め　に

世界で多くのスポーツ選手やコーチが「メンタルな要素が勝負の50パーセント以上を左右する」と認めていると言われている[2)]。これは、究極の場面においては、ともすれば身体的優位を凌駕し、心理的優位性が勝敗の決定に及ぼす比重が極めて高いことを我々が日頃痛感しているからである。言いかえれば、情意的側面、即ち心理的側面の充実が選手にとって高いパフォーマンス（performance；ここでは勝敗を意味する）を得るために不可欠な要因であることを示唆するものである。この視点から筆者らは[4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12)]、今まで選手の競技力向上を図る目的で、内面的側面、ことに、「精神力」が勝敗にどのように関係するかを取り上げてきた。スポーツ選手、特にレスリング選手の情意的側面が実際の競技の場面において勝敗とどのように関わっているかについて科学的に把握しようとしてきた。そこで、性格検査として広く受け入れられ、信頼性の高さで定評のある谷田部・ギルフォード（Yatabe-Guilford）YG性格検査（以下YG検査という）を使用して、レスリング選手の試合前の情緒変化と競技成績との関係について報告してきた。これは、選手の心理的変化が著しく起こると考えられる試合前日の計量（Weigh-In）前夜にYG検査を実施し、同じ条件下でどの性格類型の選手がどのような変化を起こすかを調べてきた。その結果、今まで漠然と、しかも経験的に捕らえられていた選手の試合前の情緒変化が、実際の試合結果と大きな関わり合いを持つことが分かってきた。それは、YG検査の性格類型と情緒尺度（D尺度：抑うつ性・Depression、C尺度：回帰性傾向、気分の変化・Cyclic Tendency、I尺度：劣等感・Inferiority、N尺度：神経質・Nervousness）及び、O尺度：客観的・lack of objectivityらの尺度にマイナス要因となって如実に反映されることが分かってきた。言いかえれば、ともすれば主観的となりがちな心理的側面の変化が客観的（科学的）にとらえられるようになった、ということである。そこで本研究は、同様の方法を用いて、同様の解析を目的として、2012ロンドンオリンピック大会のレスリング日本代表選手男子９名が如何なる心理状態で戦いに挑んだか、そして競技成績との関わりがどうであったかについて調査検討した。

Ⅱ．対象と調査方法

対象者は、2012年８月５日～８月12日まで開催された2012ロンドンオリンピック大会日本代表フリースタイル男子５名及び、グレコローマンスタイル男子４名の合計９名であった。スタイル、階級、氏名、年齢、所属、過去の成績、今回の成績を一覧にして表１に示した。本報告では、特に

表１．2012ロンドンオリンピック大会出場の日本代表男子のスタイル、階級、年齢、今回と過去の競技成績（n＝9）

スタイル・階級	氏名	年齢	今回の成績	過去の成績
F55kg 級	Y.S	27	銅メダル	2010 アジア選手権１位
F60kg 級	Y.K	27	5 位	2008 北京五輪 銅メダル
F66kg 級	Y.T	26	金メダル	2010 アジア大会 金メダル
F74kg 級	T.S	23	16 位	2011 全日本選手権１位
F96kg 級	I.T	28	8 位	2010 アジア大会 銅メダル
G55kg 級	H.K	27	10 位	2010 アジア大会 金メダル
G60kg 級	M.R	26	銅メダル	2011 世界選手権 銀メダル
G66kg 級	F.T	30	13 位	2010 アジア大会 銅メダル
G96kg 級	S.N	26	17 位	2010 アジア選手権２位（84kg 級）

選手の性格特性と試合直前の情緒変化について関心がありYG検査を実施した。１回目は普段の性格特性を知る目的で、オリンピック大会約１ヵ月前の味の素ナショナルトレーニングセンターでの強化合宿中に全選手に実施した。２回目はスタイル、階級によって異なるが、ここでは試合直前の最も緊張すると推察される試合前日の計量日（weight in）前夜、グレコローマンスタイル55kg級は８月４日夜、60kg級は８月５日夜、66kg級及び、96kg級は8月6日夜にオリンピック選手村において実施した。男子フリースタイルについては、55kg級及び、74kg級は８月９日夜、60kg級は８月10日夜、66kg級及び、96kg級ついては８月11日夜実施した。

Ⅲ．結果と考察

１．性格特性について

表２に、対象者９名の性格特性比率をまとめて示した。YG性格プロフィールの類型[1]に準じ、得られた日本代表選手９名の性格プロフィールから４つの型に分類可能であった。この結果から、D右下がり型（安定積極型）の性格特性を示す選手が４名（44%）と一番多く、ついでB右寄り型（不安定積極型）を示す選手が２名（22%）、E左下がり型（不安定消極型）を示す選手が２名（22%）、A平均型（平凡型）を示す選手が１名（11%）であった。これらの結果から、2012ロンドンオリンピック大会日本代表選手においても、すでに報告されているスポーツマン的性格[1) 2)]を示す、D右下がり型（安定積極型）の性格特性を示す選手が４名（44%）で最も多くみられた。このことは先に報告されているレスリング選手の性格特性の範疇に属していた。注目されることは、今までは競技者としてはどちらかと言えば異端視されてきた、E左下がり型（不安定消極型）を示す選手が２名（22%）みられたことであでる。先の報告において国際大会等で活躍する選手のなかにも、このE型を示す選手が漸増の傾向がみられた。従来はD右下がり型（安定積極型）を示す性格の選手はスポーツマン的性格と呼ばれ、競技者として最も好ましい性格であるとされてきた。しかし、時代の変化に相応して、従来とは異なる性格特性を持つ選手が出現し、選手の心理的側面においても質的な変化が確実に起こっていることを示唆するものであった。

表２．2012ロンドンオリンピック大会出場の日本代表男子の性格特性のタイプ及び人数とその割合（n＝9）

D　右下がり型（安定積極型）	４名（44.4%）
B　右寄り型（不安定積極型）	２名（22.2%）
E　左下がり型（不安定消極型）	２名（22.2%）
A　平均型（平凡型）	１名（11.1%）

２．情緒変化と競技成績との関係

先の報告において、対象者全員もしくは性格類型別の尺度の平均値について検討を試みたが、個々の選手の特徴が相殺され、事実の解明が不能であったことから、今回は各選手の特徴についてのみ検討することにした。付言すれば、今までの日本人的な発想の原点として、物事すべて平均的にみようとする発想（中層の精神）があり、成功する例がお多かった。しかし、世界の頂点に立つための知見を得るためにはこの発想はかえってマイナスで、他とは異なった特徴的なものに注目する必要性が示唆される。そこで今回は個々の対象者を個別に考察することにした。図は、今回対象とした選手の一回目（合宿中・○印）、二回目（試合直前・△印）についてプロットしたものである。

D型について

図１に、D型を示したフリースタイル55kg級S,Y選手の結果である（表１参照）。情緒変化について、D尺度（抑うつ性）、I尺度（劣等感）、N尺度（神経質）等の情緒側面を示す尺度においてマイナス要因への因子の変化は認められなかった。情緒的側面に最も関わりがあると推察されるC尺度（回帰性傾向・気分の変化：図中の※）の

因子が大きくプラス要因への変化がみられた。このことは、試合前において極めて冷静な心理面の充実が図られていたものと推察される。競技成績との関係は、強豪そろいの階級において、接戦を制しての銅メダル獲得であった。主観的評価でみると、金メダル獲得も十分可能な試合内容であった。

図2に、D型を示したグレコローマンスタイル55kg級K,H選手の結果である（表1参照）。情緒変化について、情緒的側面を示す尺度、D尺度（抑うつ性）、C尺度（回帰性傾向・気分の変化）、I尺度（劣等感）、N尺度（神経質）、に加えて、O尺度（客観的）等の情緒的不安定を示す尺度の因子が全てプラスの要因へ変化していた。このことは、試合前の心理的側面の充実は理想に近いものであったと推察される。競技成績との関係は、過去の実績からみて自他共に金メダル狙いであった。しかし、実際の場面において、１回戦においては強敵を下す戦いをみせたが、２回戦において、格下の選手にたいして攻防の一瞬の判断ミスが敗因となり上位進出できなかった。主観的評価でみると、常に世界の上位で活躍した選手であったが短い試合時間内での一瞬のミスを挽回することの厳しさが出た試合内容であった。格下の相手であっただけに悔いが残る内容であった。

図３に、D型を示したグレコローマンスタイル60kg級R,M選手の結果である（表１参照）。情緒変化に

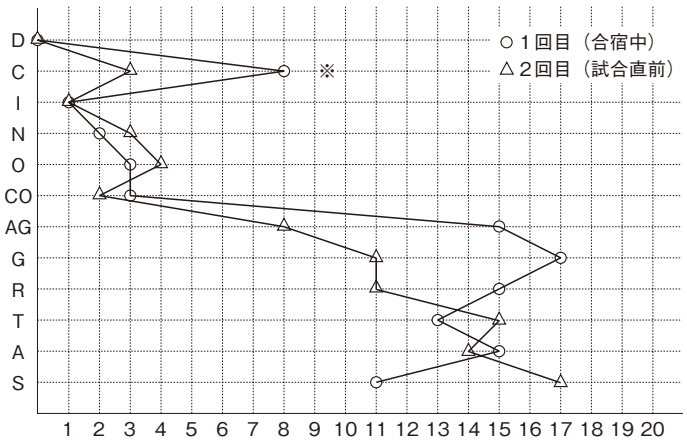

図１．D型を示したF55kg級S.Y選手

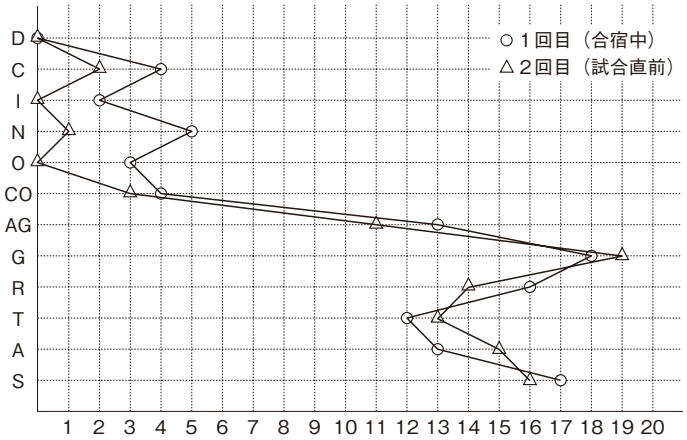

図２．D型を示したG55kg級K.H選手

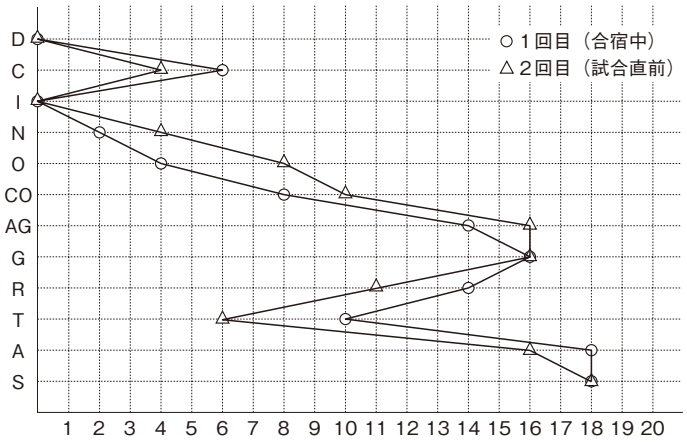

図３．D型を示したG60kg級R.M選手

ついて、情緒的側面を示す尺度、D尺度（抑うつ性）、C尺度（回帰性傾向・気分の変化）、I尺度（劣等感）、N尺度（神経質）等においてマイナス要因への変化はみられなかった。このことは、心理的側面の充実度は理想に近いものであったと推察される。競技成績との関係は銅メダルを獲得した。主観的評価でみると、決勝進出を賭けての試合において、仕掛けた技とタイムアップが際どい判定となり決勝進出を逸した。完璧に勝利することが必要である。

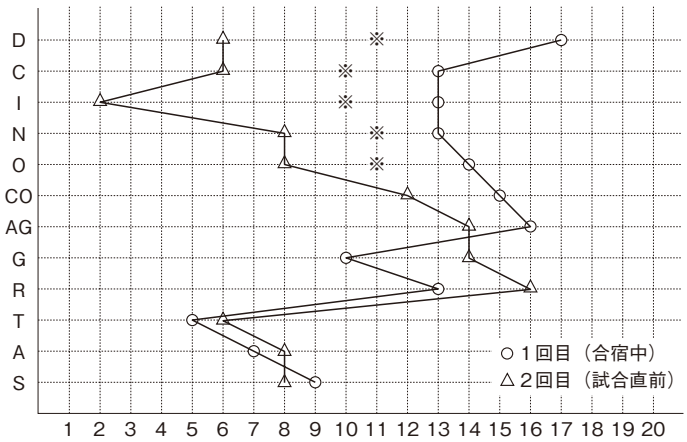

図４．B型を示したF66kg級T.Y選手

B型について

図４に、B型を示したフリースタイル66kg級T,Y選手の結果である（表１参照）。情緒変化について、試合直前に情緒的側面を示す、D尺度（抑うつ性）、C尺度（回帰性傾向・気分の変化）、I尺度（劣等感）、N尺度（神経質）に加えてO尺度（客観的）が極端に減少しておりマイナス要因はすべて見事に払拭されたものと推察される（図中の※印）。従って、心理的側面は完璧に近いものであったものと推察できる。過去に世界で活躍した選手で同様のケースを示す選手について報告してきた[8)9)]。競技成績との関係は、実力通り期待に応えて金メダルを獲得。主観的評価でみると、実際の場面で試合はすべて完勝であったと言える。男子については1988年ソウルオリンピック大会以来24年振りの金メダル獲得であった

図５は、B型を示したフリースタイル74kg級S,T選手の結果である（表１参照）。情緒変化について、情

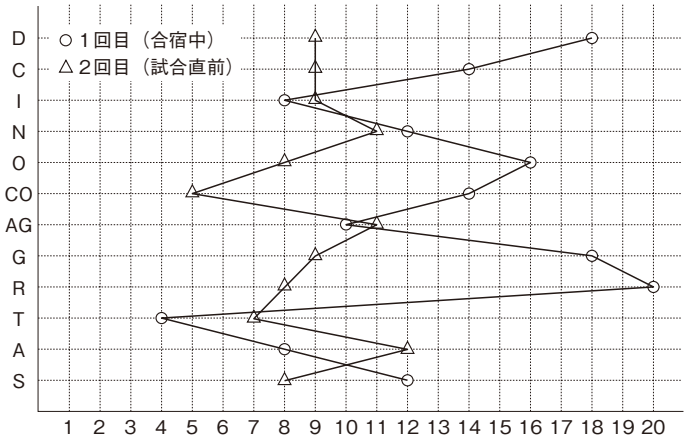

図５．B型を示したF74kg級S.T選手

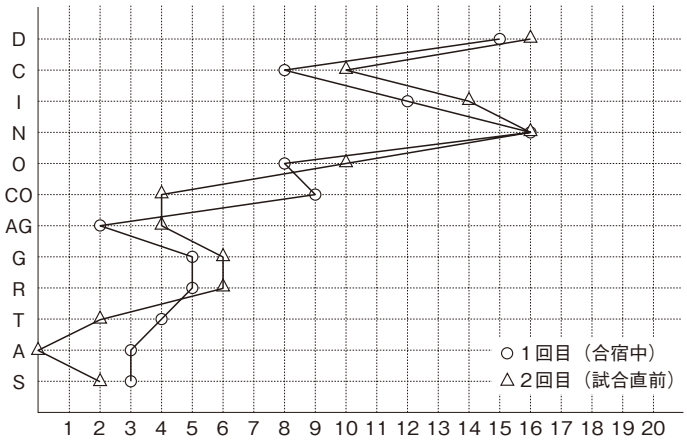

図６．E型を示したG66kg級T.F選手

緒的側面を示すD尺度（抑うつ性）、C尺度（回帰性傾向・気分の変化）は大きくプラス要因に変化、N尺度（神経質）プラス要因に変化。I尺度（劣等感）殆んど変化なしであった。このことは、心理的側面においては充実が図られていたものと推察される。競技成績との関係は、１回戦敗退であった。現行ルールの短い試合時間において最初の攻防での失点を挽回できないままの敗退であった。主観的評価でみると、相手の巧みな試合運びに敗れたものである。

E型について

図６は、E型を示したグレコローマンスタイル66kg級T,F選手の結果である（表１参照）。情緒変化について、情緒的側面を示すD尺度（抑うつ性）、C尺度（回帰性傾向・気分の変化）、I尺度（劣等感）において極少々のマイナス要因へ変化がみられたが、N尺度（神経質）の変化はみられなかった。普段は自己表現が得意でないとされるこの性格特性の選手であるが、試合直前の自分自身の心理的側面は十分コントロールされ、平常心を保っていたものと推察される。競技成績との関係は、強豪揃いの階級であったが接戦の試合内容で敗れ上位進出はならなかった。主観的評価でみると、心理的側面には問題はみられなかったが、階級制種目の宿命である体重調整（減量）の問題が大きな敗因であると推察される。

図７は、E型を示したグレコローマンスタイル96kg級N,Sの結果である（表１参照）。情緒変化について、情緒的側面を示すD尺度（抑うつ性）、C尺度（回帰性傾向・気分の変化）、N尺度（神経質）に加えて、O尺度（客観的）、の尺度においてプラス要因への変化がみられた。このことは、心理的側面の充実は十分図られていたものと推察される。競技成績との関係は、相手の先行攻撃受けての失点が敗因として挙げられる。試合内容は評価される内容であった上位進出はならなかった。

その他

図８は、A型を示したフリースタイル60kg級K,Yの結果である（表１参照）。情緒変化について、情緒的側面を示す尺度、D尺度（抑うつ性）、I尺

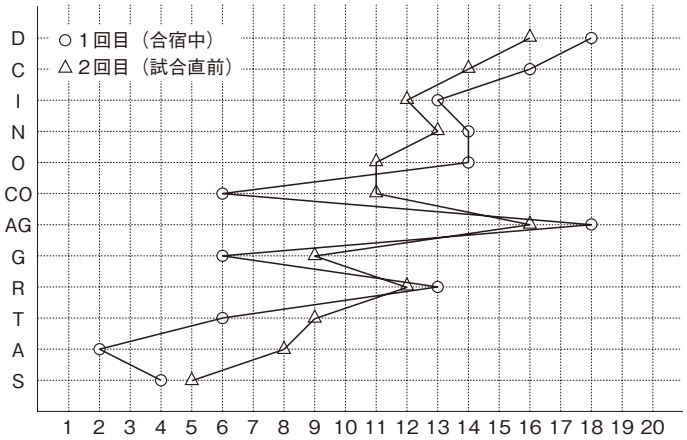

図７．E型を示したG96kg級N.S選手

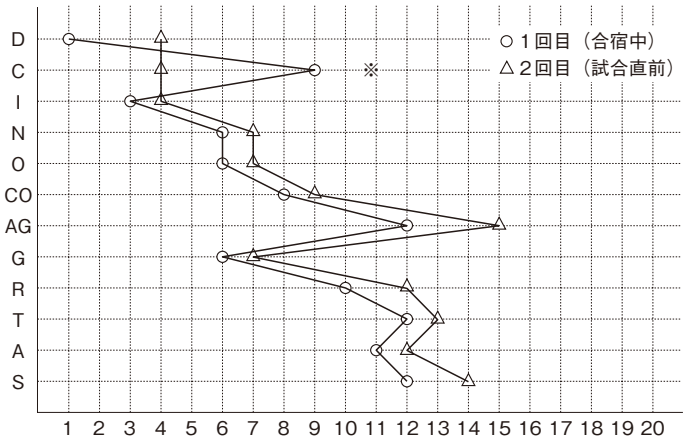

図８．A型を示したF60kg級K.Y選手

度（回帰性傾向・気分の変化）、N尺度（劣等感）は少々のマイナスに変化したが、C尺度（気分の変化）は大きくプラスの要因への変化がみられた（図中の※印）。このことは、試合への集中力を高めているものと推察される。競技成績との関係は、３位決定戦で敗れ５位であった。主観的評価でみると、強豪ぞろいの階級において自身の持つ北京五輪の銅以上の成績を期待されたが、不運な判定が重なり悲願達成はならなかった。レスリングは格闘技であると同時に採点競技でることで審判員の見解の相違がみられたケースであった。

尚、D型に性格特性を示し８位に入賞したフリースタイル96kg級の磯川選手については

資料不備で二回目の検査ができず考察からはずした。

Ⅳ．ま　と　め

2012ロンドンオリンピック大会のレスリング日本代表選手、フリースタイル５名、グレコローマンスタイル４名合計９名に対して試合直前にYG性格検査を実施して情緒的変化と試合結果との関係を調べ、以下の結果が得られた。

１）性格類型

D型右下がり（安定積極型）を示す選手４名が最も多く、次いでB右より型（不安定積極型）２名、E左下がり型が２名、A平均型（平凡型）１名であった。これらは先の報告を支持する結果であり、またE型の漸増についても先の報告の範疇にあり、生活環境、その他時代の変化に相応して、選手の性格特性においても多様な性格を持つ選手が多くなるような変化が確実に起こっていること示していた。

２）情緒変化と競技成績との関係について

金メダルを獲得したフリースタイル66kg級T,Y選手は情緒変化の因子が性格類型の判定が異なる値に変化していた。これは、30年間にわたる過去の報告においても１名のみにみられる極めて特異なケースであった。他の対象者については、各性格特性を示す選手共にプラス、マイナスのいずれの傾向にも極端な情緒変化はみられなかった。このことは、各選手ともに試合環境には支配されなかったことを示唆するものと推察される。従って競技成績との関係では、情緒の変化どのように競技成績へ関与するかについては今回は明確に確認できなかった。この結果はオリンピック大会という大舞台に立つ選手の情緒的側面を一定にコントロールできていたことを示しており、これは、レスリング協会の世界での試合経験を積ませる強化策が成功したものと推察される。しかし、主観的評価でみると短時間の試合時間内での接戦を勝ち抜ける選手の育成において、情緒的側面をどのようにトレーニングしていくべきかという点に関しては今後の大きな課題であると思われる。

謝辞；

YG検査実施について、オリンピック大会の緊迫した中ご協力賜った（財）日本レスリング協会選手諸兄、指導を賜った滝山將剛先生、査読を依頼した笠井達哉先生に衷心よりお礼申し上げます。

参考文献

１）小林晃光（1986）；スポーツマンの性格－性格からみた運動競技上達への道－杏林書院
２）花田啓一他（1968）；スポーツマン的性格、不昧堂P83～92
３）James E,Loehr・訳；小林信也（1987）；Mental Toughness reining for Sports、Tbs ブリタニカ
４）滝山將剛（1979）；レスリング選手の性格特性（第１報）－試合前後の変化について－、国士舘大学体育学所報、第５巻P31～37
５）滝山將剛・笠井達哉（1980）；スポーツ選手の性格特性、国士舘大学体育研究所報、第１巻、P19～30
６）滝山將剛（1984）；レスリング選手の性格特性－ロサンゼルスオリンピック大会の試合前後における情緒の変化と成績との関係について－日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、NoⅡ競技力向上に関する研究、P218～222

7）滝山將剛（1988）レスリング選手の性格特性（第5報）－第24回ソウルオリンピック大会の試合前後における情緒の変化と成績との関係について－国士舘大学体育研究所報、第7巻P13～19
8）滝山將剛（1994）レスリング選手の性格特性と試合直前の情緒変化と競技成績の関係、日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、NoⅡ競技力向上に関する研究、P259～262
9）滝山將剛（1995）レスリング選手の性格特性と試合直前のっ情緒変化と競技成績との関係、日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、NoⅡ競技力向上に関する研究、P291～294
10）滝山將剛・和田貴広（2007）；レスリング選手の性格特性、－2007年天皇杯全日本レスリング選手権大会兼北京オリンピック大会国内最終選考会における試合前後の情緒変化と競技成績との関係・K大学及び、K大学OBの場合－国士舘大学体育研究所報、第26巻、P27～32
11）滝山將剛・和田貴広・西口茂樹・嘉戸　洋（2010）；レスリング選手の性格特性 - 平成22年度天皇杯全日本レスリング選手権大会における試合前後の情緒変化と競技成績との関係・K大学、K大学院OB、T大学の場合及び、高校生の場合－国士舘大学体育研究所報、第29巻、P15～26
12）滝山將剛・和田貴広・嘉戸　洋（2011）レスリングの性格特性　平成23年度天皇杯全日本レスリング選手権大会兼ロンドン五輪選考会－K大学及び、OBの試合前後の情緒変化と競技成績の関係－国士舘大学体育研究所報、第30巻P27～32
13）（1978）；辻岡美延YG性格検査手引き、日本心理テスト研究所